

平成 24 年度 第 1 回横須賀市まちづくり評価委員会会議 会議概要

- 日 時 平成 24 年 7 月 12 日 (木) 15:00～17:00
- 場 所 市役所 1 号館 3 階会議室 A
- 出席者 **【委員】**
石坂委員、大武委員、葛委員、川名委員、佐々木委員 (代理 市原氏)、
細野委員、松本委員、山本委員 (50 音順) ※木村委員、西原委員欠席
- 【事務局】**
福本政策推進部長、松田政策担当課長、宮川主査、鈴木
- 傍聴者 なし
- 資料
- ・資料 1 横須賀市まちづくり評価委員会の概要
 - ・資料 2 横須賀市基本計画重点プログラム関連資料
 - ・資料 3 基本計画重点プログラム市民アンケート結果 (評価委員会版)
 - ・資料 4 基本計画重点プロジェクトの目標と重点事業の実施状況
 - ・参考資料 基本計画重点プログラム評価結果報告書 (平成 23 年度版)
 - ・横須賀市基本計画 (2011～2021)
 - ・横須賀市実施計画 平成 23 年度 (2011 年度) ～平成 25 年度 (2013 年度)
- 議事内容
1. 事務連絡等
 - (1) 辞令交付
 - (2) 政策推進部長あいさつ
 - (3) 会議の公開等について
 - (4) 委員および事務局紹介
 2. 委員長、委員長職務代理者選任
 3. 横須賀市まちづくり評価委員会の概要等について
 4. 基本計画重点プログラムについて
 5. 重点プログラム市民アンケートの概要について
 6. プログラムごとの検討
 - (1) 重点プログラム 1 『新しい芽を育む』
～子どもを産み育てやすいまちづくり・人間性豊かな子どもの育成～
 - (2) 重点プログラム 2 『命を守る』
～誰もが活躍できるまちづくり・安全で安心なまちづくり～

15:00 開 会

1. 事務連絡等

事務局から、市の附属機関となったことなどを踏まえ、委員会の位置付けについて簡単な説明を行った。

(1) 辞令交付

福本政策推進部長から各委員に辞令書の交付を行った。

(2) 政策推進部長あいさつ

- ・本来であれば、市長から辞令書をお渡しするところ、本日は市議会委員会開催中ということで私からお渡しさせていただきました。2年間の任期ということで、どうぞよろしくお願ひいたします。
- ・昨年、同委員会の委員をしていただいた方もいらっしゃいますが、新たな委員も加わりましたので、改めて私から、本委員会に期待すること、お願ひすることを若干述べさせていただきますと思います。
- ・横須賀市では昨年4月から、皆さまの机上にあります新しい基本計画がスタートいたしました。この基本計画には、11年間の主な本市の政策、施策で特にきちんとやっけていこうというものを記載しています。この基本計画の上に基本構想があり、「国際海の手文化都市」とい都市像を目指していくために何をしていかなければならないかということに記載しています。
- ・人口減少や少子高齢化など、全国的にいわれていることですが、本市ではより早くそのようなことが始まっており、持続可能性のある都市の発展という点では、非常に危惧しているところです。
- ・基本計画の中には、「重点プログラム」というものを位置付けていまして、都市力、都市の魅力を高めるために重点的かつ優先的に取り組む政策・施策を記載しています。中心的に予算をつけて、それだけはしっかりやっけていこうというものですが、この委員会ではその「重点プログラム」の進捗状況を評価していただくという重要な役割があります。
- ・評価にあたっては、市民アンケートの結果や、事業の進捗状況がわかるデータをお渡しします。最終的には行政で評価をし、市長が判断していかなければならないのですが、どうしても内部だけで評価していきますと甘くなってしまう。本委員会には市民の方、関係団体の方、広い学識の経験者もいらっしゃいますので、様々な角度から、客観的にどうなのかというご意見をいただきたいと思ひます。秋以降に内部の評価に入りますが、その時に委員会からはこのようなご指摘を受けていると、謙虚にきちんと受け止めた上で、事業の見直しや新たな取り組みなどを検討し、さらに来年度から新しい実施計画の策定に入りますのでそちらにも生かしていきたいと思います。
- ・約1カ月で全3回の会議を行う短期の委員会ではありますが、専門的な立場や市民生活に密着した立場などからご意見をいただき、本市が持続可能な都市として今後も発展できますように、どうぞご協力をお願ひいたします。

(3) 会議の公開等について

事務局から、「横須賀市まちづくり評価委員会の会議の傍聴に関する要領」に基づき、会議の公開、会議概要の公表について説明を行った。

(4) 委員及び事務局紹介

各委員及び事務局が自己紹介を行った。

2. 委員長、委員長職務代理者選任

事務局から、「まちづくり評価委員会条例」第3条の規定について説明を行った。
委員互選により、委員長に細野委員が選出された。
細野委員長から委員長職務代理者に松本委員が指名された。

3. 横須賀市まちづくり評価委員会の概要等について

事務局から、資料1に基づき、横須賀市まちづくり評価委員会の概要、進め方、スケジュール等について説明を行った。(質疑等なし)

4. 基本計画重点プログラムについて

事務局から、資料2に基づき、基本計画重点プログラムについて説明を行った。
(質疑等なし)

5. 重点プログラム市民アンケートの概要について

事務局から、資料3に基づき、基本計画重点プログラム市民アンケートの概要について説明を行った。

(細野委員長)

- ・資料3のp12に関して、それぞれの取り組みの方向性の平均値で分断すると四象限になり、平均がどこにくるかはわからないが、右側は優先度が高いものがある。その時に問題となってくるのは評価が低く優先度が高いものであり、「地域経済の活性化と雇用の創出」になるので、ここは委員の皆様へ知恵をお出しいただくということが重要になってくるかもしれない。「子どもを産み育てやすいまちづくり」、「安全で安心なまちづくり」を併せたこれら3つは関連性があるように思うので、是非ご意見をいただきたい。

6. プログラムごとの検討

(細野委員長)

- ・検討の進め方について、5つのプログラムを順に検討した後に重点プログラムの目的である「持続可能な発展を遂げるために必要な都市力（都市の魅力）」について検討し、最終的な意見をまとめて報告書を作成したいと思う。参考資料が昨年の作業結果なので、このようなイメージで皆さんのご意見をまとめさせていただくということによろしいか。

(事務局：宮川主査)

- ・参考資料は合冊になっているので、後段の p 48 以降の報告書になる。

(細野委員長)

- ・前段と後段の報告書はどのように関連しているのか。

(事務局：宮川主査)

- ・前段は市の最終的な評価の報告書で、後段のまちづくり評価委員会報告書を参考に評価している、ということで合冊になっている。

(細野委員長)

- ・以上のように、この会議は開催して終わりではなく、具体的な市政に反映されるということを中心に留めていただいて、議論に入りたいと思う。

(1) 重点プログラム1 「新しい芽を育む」

～子どもを産み育てやすいまちづくり・人間性豊かな子どもの育成～

事務局から、アンケート結果などについて説明を行った。

- ・プログラム全体は前年度と比べると左下がり
- ・各取り組みの方向性は若干右上りで、全体の傾向と相関がない印象
- ・「子どもを産み育てやすいまちづくり」の主な回答理由
良…自然環境の良さ、子育て支援施策・施設の充実
悪…産科など医療体制の不十分、保育所不足、助成など子育て支援施策の不十分
- ・「子どもを産み育てやすいまちづくり」の年齢別傾向
高齢層にはよい傾向が見られるが、取り組みの主な対象となる 30～40 歳代の「子育て世代」の支持が得られていない。
- ・「子どもを産み育てやすいまちづくり」の 30 歳代の主な回答理由
悪…産科や小児科の不足、医療費助成の不十分、保育園等の不足

(細野委員長)

- ・問題が明らかになったと思う。このアンケート結果について、まず川名委員に、現状はどうか、或いはこれよりよいはずだ、などといったご意見をお願いしたい。

(川名委員)

- ・高齢層のよい結果に反して、子育て世代の結果が芳しくないということは理解できる。

- ・50歳代以降の方はご自身が子育てをしていた時と比較して、今は充実している、横須賀市はよい、と考えていらっしゃるのだと思う。
- ・20歳代、30歳代といった子育て世代が不足感を持っている点は、そのほとんどは費用がかかることに対してのものだと思う。
- ・子育て世代のどの母親も、横須賀には公園や自然があつてよいということは実感されている。その反面、例えば医療費を小学校まで無料にして欲しいなど、費用面については皆さんがいわれていて、これは現在の経済の厳しさが反映されているのではないかと思う。
- ・他市と比較して横須賀市は不足感があるという点については、ほとんどが東京都と横浜市と比較されていて他の情報は入っていないのではないかと思う。私自身がそれ以外の他市と比較してみてもそれほど差はなく、横須賀が充実していないという印象はないが、追浜や夏島といった北地域は横浜市とのお付き合いが多く、平成町辺りは東京都からの転入が多いので、そういった方はどうしても東京都や横浜市と比較してしまって、その不足感の主なものは費用面になっているのだと思う。
- ・回答理由にある「子育て支援の場」や「子育てサークル」については、地区社会福祉協議会からの地域への働きかけによって、支援している方は60歳代以降のボランティアがほとんどで、町内会館や公民館で月に1回子育てサークルを開催されている。若い母親がお客様状態で参加してネットワークが構築できるというものが、ここ数年多くなってきている。
- ・以前は、若い母親たちで子育てサークルを作り、自分たちで互いに情報交換して学び合ったが、近年は、ご自分で動くということをされなくなった。子育てを卒業し、時間や金銭的に余裕のある方が支えている。この10年程、母親クラブでも、なんとか若い母親たちが自助努力で学び合う場を作ろうとしたが、なかなか厳しい。時代の流れなのか、今は全国的に同様であり、もはや建て前や理想を掲げても施策や支援につながらないので、時代の流れはそれとして受け止めて支援していく必要があるということを感じている。

(大武委員)

- ・10年ほど前に同じような推進活動が行われていた。未就学児が週1回集まって遊ぶ場、湘南鷹取の有償ヘルパー、北下浦のパソコン指導を行う法人等があったが、最近では母親が「お客様」になっており、推進している側が耐え難くなり閉鎖してしまい、自治会が新しい組織として継続するという状況である。
- ・どの集まりを見ても、主体的に行動する人は少なくなって、お客様としてならば参加するという様子で、汗を流す、努力しようという雰囲気がない。地域のコミュニティー力が落ちてきていると思う。少子化によって子ども同士の会話がなくなっている中では非常に有機的な取り組みではあるのだが、若い母親が先輩の母親方に相談できるようになっていけばよいが、そこまで至っていないようだ。

(細野委員長)

- ・若い親、若い方に自主性や自分たちで解決したり力を合わせたりということがなくなったという意見だったが、お若い委員はいかがか。

(石坂委員)

- ・若者の自主性、自主自立が欠けているということは、周囲からも指摘されるが、自身で

も感じている。学生生活でも、自分から動かない、例えば議論の場でも周囲を伺って発言を控えている、誰かが発言するのを待っているような雰囲気がある。私は極力、積極的に発言するようにしたり、サークルを立ち上げたりボランティアで活動したりしているが、それに共感して動いてくれる人はとても少ないと実感している。

- ・解決策としては、自主自立の考え方をどのくらい共有化できるかだと思うが、そのような価値観の共有はなかなか難しく、私のような考え方は逆に少数派ではないだろうか。

(葛委員)

- ・ご意見のとおりだとは思う。ただ、私たちが幼い頃に、何でもやってくれる大人が多かったことが大きいと思う。そのような環境じゃないと、今の状況にはならないのではないかな。何でもある世の中なので、自分が動かなくても影響がない、どうにかなってしまうという状況も要因なのかなと思う。

(細野委員長)

- ・2点問題が指摘されたが、まず、東京都や横浜市と比較してしまうという点については、無い袖は振れないので、子育て環境を良くしていくためにどのように協力していけるか考える必要がある。また、そのための地域力、住民力をどのように構築していけばよいのかということは非常に大事で、施策についても考える必要がある。

(山本委員)

- ・葛委員から「何でもやってくれる大人がいた」というご意見だったが、以前は自分で準備をしなければいけないという状況だったが、ある次期から学校が丁寧になった。学級通信では一週間の予定や時間割を入れ、持ち物を書き、家庭に知らせることで親が手伝うようになった。私は、基本的には、自分のことは自分でする、自分でできることが大切だと思っている。
- ・懇談会でも、子どもたちを自立させるために自分で準備をさせてほしい、子どもが忘れ物をしてもし気にしないでほしい、その分、愛情込めて料理を一品作ってあげてほしいなどと呼びかけてきた。何でもやってもらったがために、今一番問われているコミュニケーション能力が薄い子が多くなったと思う。手伝い、勉強など何事も自分でやり、地域で年上の子どもたちと遊び、地域社会で育ててもらったという環境が、本当はよかったというところにいつも話がいきつく。
- ・母親たちも我が子に強い思いがある。人生のうちの10～15年の間の一時点を見て、できる・できないということに捕らわれることなく、もう少し長い目で見るといいう話をよくしていた。
- ・以前は、学校は地域の中というより学校は学校、地域は地域というように分かれていたが、近年は「開かれた学校」ということで、自分が地域の中の一員だということ意識してほしいということを職員にも伝えており、教育の現場も頑張っているところで、徐々に変わってきているように思う。しかし、アンケートを見ると、私たちは真摯に受け止めなければいけない結果だと思うと同時に、教育現場も同様の課題を抱えていると感じている。

事務局から、「人間性豊かな子どもの育成」にかかるアンケート結果について、説明を行った。

- ・大きな動きはないものの、以前よりはよいという傾向である。
- ・主な回答理由
良…市の取り組みの成果、学校教育環境の充実、子ども見守り活動
悪…実感がない、教師の質の低下、親や家庭が良くない、その指導がない
- ・年齢別傾向
取り組みの主な対象となる 30～40 歳代の「子育て世代」の支持が得られていない。
- ・30 歳代の主な回答理由
悪…実感がない、市の取り組みの成果が見えない

(細野委員長)

- ・施策のターゲットは 30～40 歳代となる。その年代層が厳しい評価をしている状況だが、全てを市の施策でカバーすることはできないので、どのようにしたらよいかを考えていく必要がある。まず、山本委員から、現状や、それは改善傾向であるなど、ご意見をお願いしたい。

(山本委員)

- ・30 歳代はお子さんが小学校低学年か、幼稚園や保育園の方が多いかと思う。本を読まない子が増えている。ゲームなど一人で遊べるものが目の前にあることも、理由の一つとして考えられる。教育長も図書館の活用を推進している。私も図書館を利用する子が増えてほしいが、「図書室があり本に親しみやすい」ということがよい回答理由になっているのは残念に思う。
- ・図書館よりも、学校の子どもたちが楽しんで行ける施設がないのではないか。例えば、横浜市には歴史博物館やプラネタリウムや動物園などがある。学校でバスを借り上げて見学に行っている。子どもたちが歴史博物館などに行って感じるもの、学べるものは多いと思う。身近な横須賀にそのような施設があるとよいと思う。

(大武委員)

- ・その点については PR 不足かとも思う。学びという点では、天空を見られるところはないが、横須賀にも文化会館や観音崎の近くに小造りだが博物館などはある。しかし、平日にほとんど人がいない現状があり、PR 不足かもしれない。

(細野委員長)

- ・天文に限らず、横須賀にも例えば幕末や第二次世界大戦の井上成美などについて学べる場所はたくさんある。それらを学校の教材に使用することができるし、課外授業など外で学ぶことは大切なことだと思う。行政がそれらを周知することで、地域に対する関心や誇りが培えると思う。

(大武委員)

- ・海軍の基地を有している市にしては歴史観がないと思う。好戦的ということではなく、事実をきちんと証明するものがあって、その中で歴史を考えるということがあれば、もっと目が開けるかもしれない。開国に関して、浦賀など横須賀は色々なものがあり、コアとなる部分で作れば、自然に様々なものが集まり、観光という面も含めて横須賀の

魅力になるのではないか。

(細野委員長)

- ・郷土史家は多いようなので、地域の小・中学校の児童生徒に課外授業などで伝えてみてはいかがか。

(山本委員)

- ・教科では、「総合的な学習の時間」というものがある。先ほどの博物館などは小学校3年生の「むかしを学ぶ」という学習の中で体験している。郷土や地域などの身近な歴史について学ぶことは「総合的な学習の時間」や「生活科」で意識して身近な問題として取り組んでいる。先ほどの施設としての博物館などは少々異なる観点かと思う。

(川名委員)

- ・観光ボランティアの方の話では、自分たちから学校への申し出はし難いが、依頼があれば活動できるということだ。市外の教育機関からの評価はあるようだ。
- ・アンケートに毎回のように書かれる「教師の質の低下」については、感情の行き場がないことで学校、教師に向かってしまっていて、逆に仕方がないことと思う面もある。親の質も変わってきていて、それに対応していて教員たちの時間がないことをどのように解決していくかが非常に問題となっている。私立には退学があるので抑止力にもなっているが、公立は難しい上にこのように書かれてしまうのは気の毒でもある。

(事務局：宮川主査)

- ・アンケート結果について別の視点から補足すると、p24のように、15～29歳という比較的の学校で学んだ時期に近い年代の回答はよい傾向になっている。

(松本委員長職務代理者)

- ・アンケートの読み方次第である。D Iには反映されていないが、「やや思う」と「やや思わない」の間となっている「どちらともいえない」「変わっていない」と回答している人が増えているのではないか。この結果だけを見るとマイナスだけが目立つが、実際には「まあ、このようなものだろう」と、ある程度の評価をしている人がどのくらいいるのか知りたいと思う。
- ・悪い回答理由を見ると、不利益を被ったり日頃からよく思っていなかったりという個人的不満やクレームのようなものが際立っている。日本の教育では問題点を指摘させるような方法が多く、プラスの評価をさせる教え方があまりないので、その弊害がこのような場面で表出してしまっていて、よい回答は、“非常に”よい場合に評価されていて、普通によい、客観的によいという評価がよい回答の方に出てきていない印象がある。委員長が指摘していたが、全てを行政で担えるわけではないので、その点を考えてアンケートを読む必要がある。
- ・特にこの章では、30歳代の方は敏感に反応している印象がある。重点プログラムとして予算をかけてやっていることとマッチしていないので、その点も踏まえて読まなければいけないと感じる。回答の中で指摘されていることは考えていかなければいけないが小さな意見に引っ掛かってもよくはならないので、回答者にもプラスの方向に評価するような精神構造になっていただくようにしないと人間性豊かにはならないと思う。

(大武委員)

- ・待機児童の多少がよく取り上げられるが、待機児童がいることが悪いことなのかどうか疑問にも思う。3歳くらいまでは親がしっかり養育するということができないと、その後の成長、人格形成に関わると思う。本来どこに軸足を置くべきかという議論があってもよいのかではないか。生活が苦しいからとか外で働いた方が（金銭的にということではなく）気分的によいとか、子どもを預けたい理由はわからないが、待機児童をゼロにすることが本当によいのか。本当に必要としている人に必要なかたちで応えられる仕組みにすることが必要である。就学した場合の働いている親が利用する学童は高額だが、ランドセル置き場なども準備は進んできているので、支援する仕組みはできてきている。利用する側がどのような目的で利用したいと思っているのか、どのように進めていくのか、整理が必要かと感じる。

(細野委員長)

- ・女性の高学歴化が進み、自分のキャリア形成と子育てを両立させたいという人も増えているし、収入面での不安もあるので、合理的にならざるを得ない状況も否めない。そうすると待機児童は増えてしまうし、このような状況をどう改善していくべきか考えていかないと、若い世代は横須賀を選択してくれないということになってしまう。

(川名委員)

- ・ベネッセのサイトで、子育て中の母親が登録するものがある。転居先の地域に登録して質問をするシステムだが、先ほどの東京都や横浜市と比較すると横須賀市は圧倒的に登録数が少ない。その中で一番多い質問が幼稚園や小学校の状況であり、その次に多いのは保育園があるかどうかというもので、それらの回答が好ましい状況であれば横須賀市に住もう、と思われている方が非常に多いということが実状としてある。

(細野委員長)

- ・20～40歳代の人を横須賀市に招くために、他の自治体でも都市間競争をしていると思うが、ただ今いただいた情報も加味して、どのようなアピールが必要となるのか考えていく必要があるかもしれない。

(2) 重点プログラム2 『命を守る』

～誰もが活躍できるまちづくり・安全で安心なまちづくり～

事務局から、アンケート結果などについて説明を行った。

- ・それほど大きな動きはないが、若干左側に移動
- ・取り組みの方向性では「安全で安心なまちづくり」が特に左下がり
- ・「誰もが活躍できるまちづくり」の主な回答理由
良…施策の充実、ノンステップバスの普及、地域ボランティアで活躍する人の増加
悪…経済の低迷、雇用の減少や活気のなさなどこの章での直接的なものではなく活躍の土台となる面、バリアフリー対策の不十分
- ・「誰もが活躍できるまちづくり」の年齢別傾向
若い世代のマイナスポイントが増加し、40歳以上はプラスに移動

- ・「安全で安心なまちづくり」の主な回答理由
良…犯罪の減少、治安の良さ、防災関係の取り組みの充実
悪…犯罪の増加、基地関係、通学路の狭さ
アンケート期間中に他都市で通学路における事故があった影響も考えられる
- ・「安全で安心なまちづくり」の居住地域別傾向
市内を6つに分けた地域別で見ると全てマイナスで、特に衣笠と西の地区が悪い

(大武委員)

- ・前回調査の結果でもあった地域差が顕著であるという傾向は、今回も変わっていないようだが、その原因は推察できるか。なぜ衣笠が突出してよくないのかわからない。衣笠地域は、平成町や久里浜のように、娯楽施設や大型ショッピングセンターがあるわけではなく、昔から平均的な街である。

(細野委員長)

- ・事務局はどのように分析しているか。

(事務局：宮川主査)

- ・アンケートの回答理由でしか分析材料をもっていない。衣笠地域における犯罪件数の上昇率などのデータを把握していないので分析が難しい。

(事務局：福本政策推進部長)

- ・誰に尋ねても、衣笠地域が極端に悪い原因がわからない。西地域については、台風の避難勧告や、震災の影響で、津波を一番受けるという点が考えられる。

(細野委員長)

- ・前年度に36.5ポイントであったものが84.5ポイントまで跳ね上がっている。111人という回答数を見ても異常値ではないと思うので、精査が必要かもしれない。

(石坂委員)

- ・衣笠地域の住民層はどのような特徴があるのか。

(事務局：宮川主査)

- ・衣笠地域の中心地は、JRの駅があり旧市街地が広がっているようなところで、少しは新しく造成された住宅地もあるが、新住民というよりは昔から住んでいる人が多い。横須賀の中心に位置していて、道路が結節してくるような地域でもあり、元気な商店街がある昔からの街である。

(石坂委員)

- ・衣笠地域の回答理由を見ると、衣笠限定のものではなく、横須賀市全体に関する意見が多い印象があるので、市全体に危機感やマイナスな実感を持っているということは、衣笠地域に住んでいる人に詳しい話を聞けば問題点が見出せるのではないかと。昔から住んでいるということは行政に関心があるのではないかと。

(松本委員長職務代理者)

- ・以前との比較を見ると「よくなっている」に振れているので、23年度が震災や原発などの影響で極端な数値が出たのかどうか、読み方が難しい。悪い回答も増えているので、D Iに出ない中間の回答ポイントが移動したとも考えられる。

(事務局：宮川主査)

- ・数値の読み方が誤っているかもしれないので、精査したい。

(細野委員長)

- ・交通、通学路やバリアフリーなどについて、市原さんはいかがか。

(佐々木委員代理 市原氏)

- ・バリアフリーに関しては、我々電鉄会社は駅などで積極的にやらせていただいている。しかし、横須賀市で考えると、衣笠地域に限らず中心部は交通渋滞が多いし、古い家の多いところでは道幅が狭いという印象はある。私は横須賀に住んでいるが、見ている小さいお子さんが歩いている通学路はまだ整備されきれていないと感じているので、改善の余地があるのではないか。

(細野委員長)

- ・通学路について、子どもたちの登下校時など、山本委員はいかがか。

(山本委員)

- ・とても心配である。地域力とも関係するが、地域の方々が、お孫さんがいらっしゃらなくても見守り隊に入って登下校を見守ってくださっているのが今の横須賀である。町内会を中心に、自分たちの地域の子どもたちを見守っていこうとしていて、感謝の思いである。
- ・本校の場合は鷹取川の工事をしていてその迂回路が非常に危険になっており、企業や教育委員会との連携で、ガードマンを配置していただいた。行政が通学路の点検、見直しを行っているところなので、問題意識を持ってくれていることはありがたい。
- ・職員は学校の受け入れ体制を作る必要もあり登下校時に対応することは難しいので、地域の方々にお願いしている状況である。

(細野委員長)

- ・そう考えると元気なお年寄りや地域の財産といえる。60歳以上の方の具体的な回答理由についても、もっと考える必要があると思う。横須賀の高齢者の方々は外に出て活動することは多いのだろうか。

(川名委員)

- ・同じ方が多方面で長期間活動しており、見守り隊も、次の世代の方が入ってこないというジレンマがある。
- ・西地域の回答理由に「福祉バスを多くしては」というものがあるが、地域の企業に助けをいただくのも一法だと思う。久里浜にできた大型スーパーのイオンがバスの循環を始めたことで、市議に対する福祉バス関連の陳情が減るなど効果があるようだ。クリーンよこすか関連でも、イオンでビニールバックの削減を広告してくださっているなど、地

域の高齢者との協力と同時に、企業との連携でも解決できるものがあると思う。

(細野委員長)

- ・企業は、企業市民というかたちで積極的に入ってきてほしいと思う。利益追求だけではなく、社会的な責任ということも考えないと地域に溶け込めなくなるだろう。

(川名委員)

- ・安全面について、女性の立場から、葛さんは大学からの帰りが夜遅くなる場合の不安などいかがか。

(葛委員)

- ・自宅は駅から15分程徒歩であるが、危険を感じることはあまりない。たまに警察がパトロールをしている。

(川名委員)

- ・お友達の話など耳にすることはあるか。

(葛委員)

- ・変質者がいたなどの話は聞くので、やはり警察のパトロール強化をしてほしいが、最終的には自分で何とかするしかないという気持ちでいる。

(大武委員)

- ・この章で大きく占めるのは、高齢者や障害者がどのように社会参加するかという課題であり、それに対する施策は色々出てきている一方、障害者の雇用促進などが進まない事実がある。
- ・雇用・就労の数字を追いかけるあまり、就労の定着、継続は見落とされがちである。離職の原因が深く、立ち直れずにひきこもりになるケースもある。促進事業そのものは福祉の観点からよいと思うが、どうすれば定着するかということも分析していかなければならないと思う。企業側も安心して雇用できるだろうし、雇用するためにどのような施策が効果的か考える必要がある。
- ・重度障害の方の施設もできる予定であるし、療育相談センターも機能してきて、手を差し伸べなければならない人の成長促進は軌道に乗っており、施策が充実してきているのは事実である。
- ・高齢者が個人の趣味に取り組む一方で、地域に目を向けるかたちで活躍すればよいが、活躍する人は同じ人ばかりなので、それがもっと広がっていけばよいと思う。

(細野委員長)

- ・ひきこもりの方は多いのか。

(大武委員)

- ・そんなに多くはないが、いないわけではない。

(細野委員長)

- ・プログラム2はハードな事業が多く、恐らく新規事業よりも更新投資の比重が高くなる

だろう。そのようなデータベース化は大事になってくると思う。

(事務局：福本政策推進部長)

- ・いわゆるファシリティマネジメントに取り組んでいるところで、学校を含めた施設の建替え時期が今後集中してくる。恐らく全国の自治体が同じような状況であり、非常に大きな課題である。全てを更新できるかわからないので、残していく施設、更新する施設など分ける必要がある。

(細野委員長)

- ・小・中学校の耐震対策は終了しているのか。

(山本委員)

- ・横須賀市は100%終了している。

(事務局：福本政策推進部長)

- ・横須賀は対応が非常に早かった。

(細野委員長)

- ・他市も同じような状況か。

(山本委員)

- ・よく新聞に取り上げられているし、課題になっている。

(細野委員長)

- ・学校耐震化100%は認知度が低いのでPRが必要かもしれない。

(山本委員)

- ・どの学校の校長も、防災教育に力を入れている。学校は避難所になる。連絡員を派遣してくださるなど、行政と学校が連携しながら地域防災を含めた活動を行っており、それらを学校だよりなどで発信している。津波訓練をしても参加者が増えて意識が高くなっていると感じる。「自分の命は自分で守る」が学校の防災教育の原則であるが、学校で発信しているものが子どもを通して地域に伝わっていると思う。安全・防災関係については、行政、学校、地域の連携はまだまだPR不足であると感じる。

(細野委員長)

- ・学校間、地域間での連携はあるか。行政間、例えば海岸側と山側の自主防災組織などの連携はどうか。

(山本委員)

- ・学校間ではまだ行われていないが、自主防災組織間の連携はある。

(事務局：福本政策推進部長)

- ・東日本大震災が非常に大きな教訓となっている。震災時に避難所の運営が上手に機能していなかったところが多く、市議会でも毎月のように集中的な検討を行っている。詳細

なマニュアルの作成に始まり、様々な取り組みをしている。防災計画が見直される来年度以降、目に見えるかたちになると思う。

(大武委員)

- ・誰にでも優しいまちづくりということで、平成町や三笠通りの再開発が進む中で、トイレや表示板など、公的な場所も含めて、横の連携による調和のとれた建物づくりがなされていないように感じる。例えば、最近できた平成町のハウジングプラザの駐車場の車止めはスカイブルーで造られている。これは弱視の方にとっては非常に危険である。そのような一つ一つの積み上げがないと、住みやすい、命を守るという精神が有るのか、ということにつながる。課題の一つとして考えてほしい。

(事務局：福本政策推進部長)

- ・公共施設に関しては必ず意見を聞く場を設けている。景観色彩に関しても外壁などは大きい建物は指導をする。バリアフリーに関しても昇降機や障害者用のスペースを作るなどについては審査があるが、色についてはわからない。

(大武委員)

- ・障害者用駐車場の車止めの色なので、綺麗かもしれないが非常に危険である。意識が足りないのかなと思う。

(事務局：福本政策推進部長)

- ・担当課に伝えたいと思う。

(細野委員長)

- ・重要な指摘である。事故が起こっては、今までの努力が無駄にもなる。

(川名委員)

- ・アンケートの回答理由に「キャバクラ等の店が増えている」という意見がある。横須賀中央では17時位から黒服の方がいて、小学生など子どもがその中を通ることに不安がある。横須賀の集客資源は自然環境の面が強く、歓楽街ということではないと思うので、マイナスになるのではないかと思う。これは行政の指導の範囲外で、町内会関係などでの対応になってくると思うが、放置していると様々なところで影響があるのではないか。

(細野委員長)

- ・地元の八王子市では、市長と教育長が客引きへの対応や看板の撤去を行っている。地域の方の参加や警察の協力もある。行政が圧力をかけるということも必要かもしれない。

(事務局：福本政策推進部長)

- ・一時期多かった時期があり、その時は地域の方が動いて警察の指導が入って減ったが、また増えてきた印象がある。

(細野委員長)

- ・時間が迫っているが、ほかに意見はあるか。プログラム1でも構わない。

(大武委員)

- ・資料4のp6の国際のコミュニケーション能力育成事業にある「B」とはA～Cの3段階での「B」ということか。

(細野委員長)

- ・次回でよいので事務局は確認してください。

(松本委員長職務代理者)

- ・同じく資料4のp1で、小学校の学年末評定が「2」以上であった人というのは3段階か。またその実績はこのようなものなのか。

(山本委員)

- ・3～1の3段階である。頑張っこのような数字である。小学校は学力の基本で基礎的な学力の定着に力を入れている。

(大武委員)

- ・横須賀市では京急バスがアクセスの中心になっているが、なかなかノンステップバスの台数が増えない。車イス利用者などから、時刻表を明確にしてほしい、昇降時間がかかる、乗客の支援がいただけると嬉しいなど改善要望は多い。京急タクシーも同様である。街の中を一生懸命に移動するので、心に留めて欲しい。住民意識の問題もあると思う。

17:00 閉会

第2回まちづくり評価委員会会議の開催日時・場所を確認して閉会とした。

(以上)